

中国空軍ニュース：SU-35 を最初に装備するのはどの部隊か

漢和防務評論 20150202 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍は、ロシアから新型の SU-35 型多用途戦闘機を導入しようとしています。購入するのはわずか 24 機だけであり、中国空軍にとっての SU-35 の位置づけはいまいち明確ではありません。漢和防務評論誌は中国国産の次期ステルス戦闘機へのつなぎではないか、とか先進技術を獲得するためではないか、と述べています。ロシアは自国空軍の採用とほぼ同時期に中国に同型の先進型戦闘機を売るわけですから反対も多いのですが、プーチンの意向が強いので売却交渉が進んだものと思います。当然同じスペックではないでしょう。この点が技術屋さんの工夫のしどころであると思います。

漢和防務評論誌ネット版 2 月号は、中国が SU-35 を導入して初めて、中国が日本、台湾、韓国に技術的優位に立つと述べています。中国空軍が SU-35 の性能を過信し今後東シナ海で冒険的行動に出てくる可能性もあります。

平可夫

中国空軍で SU-35 を最初に装備する部隊はどの部隊か？ KDR は今まで、SU-35 に関する中露間の交渉経過を詳細に報道してきた。もし交渉が順調に進めば 2015 年内には、最終的な契約が締結される。” 共産主義青年城” 航空機会社で生産されるロシア空軍向け最初の SU-35 (48 機) の生産は、2015 年に終了するはずである。したがって 2016 年には中国向け SU-35 の生産が開始される可能性が高い。最初の中国向け SU-35 が中国に引き渡される時期は 2017 乃至 2018 年になろう。中国空軍が SU-30MKK や J-10 等の作戦機を導入した手順を振り返ると、SU-35 が最初にどの部隊に配備されるかその傾向を発見することができる。今のところ、中国空軍内部ではどの部隊に最初に配備するか未だ最終的に決定されていないはずである。KDR は、最初に配備される可能性がある中国空軍基地を衛星写真を通じて継続して監視しているが、現在大規模な基地の改修等の動きは見られない。現在中国空軍内部で SU-35 の激しい争奪戦が行われているであろう。SU-35 争奪戦に勝利した部隊は、各種の基地施設が続々と新設され、” 成金部隊” となる。中国空軍が新型作戦機に換装する際の従来の評価基準は以下の通りである：

1999 年以降の中国空軍の換装状況から見て行く。

最初は SU-30MKK への換装である。評価基準の第一は、作戦上の要求である。中国空軍は特に台湾海峡での作戦を重視し、南京軍区空軍が SU-30MKK の最初のユーザーになった。第二のユーザーは広州軍区空軍である。したがって最初の SU-30MKK は、2000 年 12 月航空兵第 3 師団の蕪湖基地に配備された。2003 年以

降受領した SU-30MKK は、広州軍区長沙基地の航空兵第 18 師団及び南京軍区衢州基地の航空兵第 29 師団に配備された。

評価基準の第二は、機種の特性の連続性である。SU-30MKK は多用途戦闘機であり、同機導入以前、中国空軍はこの種の戦闘機を保有していなかった。したがって戦力化を円滑に進めるため、多用途戦闘機に換装されるのは通常最優秀の戦闘機師団に限定される。

制空権獲得を目的とした J-10 型戦闘機に換装した部隊は、通常 J-7 シリーズを有する戦闘機師団であった。JH-7A 戦闘爆撃機に換装した部隊は Q-5 型攻撃機を有する部隊であった。

評価基準の第三は、軍区空軍間のバランスである。南京軍区及び広州軍区が次々に新型機に換装された後、その他の軍区空軍は、新型機種の連隊が少なくとも 1 個配備された。SU-35 は機数が少ないため、この点は考慮する必要がない。

評価基準の第四は、ロシア製戦闘機の運用経験を有する部隊であること。例えば、SU-30MKK への換装では、最初に航空兵第 3 師団に配備された。同師団は最初に SU-27 に換装された部隊である。

以上のことから、どの部隊に最初に SU-35 が配備されるかは、上述の第一、第二、第四の評価基準が参考になる。第一は SU-35 の機種の特性である。SU-35 は依然として多用途戦闘機の位置づけであり、SU-30MKK と同じ特性を持つ。ロシア空軍で最初に SU-35 が配備された部隊は、LIPETSK にある空軍飛行訓練センターであるが、これは必要性から考えれば当然である。ロシア空軍の先進型戦闘機は全て最初にこの部隊が受け入れる。中国空軍での類似部隊は、滄州にある戦術訓練センターである。したがって滄州の戦術訓練センターは少数の SU-35 を受け入れるであろう。しかしわずか 1 個連隊分 24 機しかない輸入機を中国空軍は如何に分配するのであろうか？ 不思議なことに長沙の航空兵 18 師団の SU-30MKK 保有数は未だ定数に満たず 19 機である。すなわち定数に足りない分は滄州の戦術訓練センターに回されていたのである。したがって作戦部隊に配備される SU-35 は 24 機に満たない可能性があるとして KDR は考えている。

ロシア空軍の SU-35 の配備状況を見ると、第二グループの SU-35 は、2014 年 2 月 12 日、DZYOMGI 空軍基地の第 23 戦闘機連隊に配備された。同連隊はすでに SU-27SM の運用経験がある。SU-27SM は、SU-27S の改良型で多用途型であり、ロシア空軍が SU-30SM を受領する前は、SU-27SM が實際上、ロシア空軍の簡易版多用途戦闘機であった。したがって SU-27SM 多用途戦闘機を SU-35 に換装することは、ロシア空軍の慣例、一般常識にかなっている。

このように見てくると、中国空軍部隊の中で SU-35 を最初に導入する条件を満たす部隊は、SU-30MKK を保有し運用中の連隊、すなわち航空兵第 3 師団第 9 連隊、同 29 師団第 85 連隊、同 18 師団第 54 連隊である。SU-30MKK の運用経験が豊富な部隊であれば、SU-35 導入後に発生するであろう諸問題の解決はそれほど困難で

は無かろう。ロシア空軍は基本的にこのように考えている。次に重点換装部隊は、最初に南京及び広州軍区空軍から選定されるであろう。上記 3 個連隊のうち、どの部隊が最初に SU-35 を獲得するか？知名度、作戦上の要求から判断して当然航空兵第 3 師団第 9 連隊であろう。同部隊は台湾海峡、兼ねて東シナ海に面しており、SU-27SK 及び SU-30MKK を最初に運用した経験もある。更に蕪湖基地には設備の整ったロシア製戦闘機の最大の修理工場があり、今後 SU-35 の修理作業はこの地で行われる可能性が高い。このためには新たな検査施設等、相当大きな投資が必要になる。ロシア空軍では SU-35 用の大修理施設を現在建設中である。

近年来、中台関係の好転に伴って、中国軍は、南シナ海方面に多くの注意力を指向している。したがって広州軍区空軍の動きが大幅に増加している。航空兵第 2 師団遂溪基地の第 6 連隊は、SU-27SK の第 2 番目の換装部隊である。したがって第 2 の候補部隊として、当然長沙の第 54 連隊が挙る。

SU-35 を導入することは、中国空軍の SU-30MKK 装備部隊が増えることを意味する。なぜなら 1 個連隊が SU-35 に換装されれば、従来保有していた SU-30MKK をその他の部隊に移管しなければならないからだ。したがって今後航空兵第 2 師団が SU-35 を獲得した場合、SU-30MKK の行く先に注意する必要がある。

ソ連空軍や中国空軍は、通常、機体の維持整備の容易さを考慮して、1 個飛行連隊に 2 種類の戦闘機を装備した例はなかった。このことは少数の SU-35 を滄州の戦術訓練センターに配分したあとは、他の SU-35 を 2 つ以上の飛行連隊に再分割することはないということである。

現在、SU-35 は、東南アジアでは最先進技術の戦闘機であり、中国空軍に導入されれば、初めて日本、台湾、韓国に対して暫時技術優勢を獲得することになる。

SU-35 は、SU-30MK2 のように最初に海軍航空部隊に配備されることはあるか？今のところ、可能性は低い。SU-35 は、ロシア軍の定義によれば、制空権獲得型多用途戦闘機である。まず第一に、制空権争奪の要求を満足させなければならない。中国及びロシアでは、通常の下で、先進型戦闘機が最初に海軍に装備された例はない。現在ロシア海軍が導入を検討しているのは、SU-30SM であって SU-35 ではないのがその証左である。

以上